

---

# 野生と生きた 88年

高橋 清 (29C 応化)

---



スタンレー公園

## その8：カナダの生活 – 管理職

カナダに移住して5年目、全く予期しなかった管理職を命じられた。実は基礎研究を重点課題と心に決めていた僕にとっては、正直のところ重荷で、かなりためらったために、工場長にお願いして一晩考えた上で、翌朝受諾の意を伝えた。それまでこの職は Laboratory Manager とされてきたが、この機会に正式に Technical Director と職名も変わる事となった。今まで集中して来た新製品開発研究から、工場全体の技術管理をも担当することになった。やがて社長がトロントから訪れて、正式に辞令が交付された。社長の訪問時は居室がないため、僕の椅子を使って頂きたい、と申し入れたが、社長は「そんなバカなことができるか」と、隣部屋にいる秘書に言って、僕の机の横に椅子を据え、僕の電話を使いながら、そこで一日過ごされた。新しく僕の秘書となったほぼ同年配の女性は、以前と変わらず友人並みに気楽に接してくれた。

社長から「何を一番最初の仕事として考えているか？」と聞かれ、僕は足元だけの計画に異論を示されると覚悟して、躊躇せずに「部員の健康管理のために研究室の空気の浄化を図りたい」と伝えると、「いい計画だ、早く実行しなさい」と意外な返事をいただいた。本来ならある特定の製品開発等の提案を行うべきなのだろうが、新しい職に戸惑っており、自分の専門以外の成形剤、塗料用ポリマー等の分野に関する知識に自信が持てる程ではなかったからでもあった。当時を振り返ると、恐らく社長は、新参者の能力を承知していたと、後になって強く

感じたものである。当時を振り返ると、この頃から僕の身体の中には大きな異変が発生していた。

実は研究室で仕事に就いて以来、室内の空気が悪く、特に合成実験に使うドラフトは排気装置が壊れていて、室内に排気もろに流出していることに気づいていた。研究室内の研究員の机は、その一角に集められて、ホルマリンを使う合成をすることの多かったこの数年、僕が合成実験をすると、咳をする者が多く、誰も平常のことと気にしないでいた。それが気のつかない間に身体を蝕んでいて、5年目の昇格時には既に気管支炎を発症していたようだ。数年後には、呼吸困難のために入院を繰り返すことが度重なり、神経的に厳しい仕事であった、カナダ全土、アメリカ東部への出張の折には、発作が起こったのは飛行機での帰路に一度だけだったのは幸いであった。

カナダ移住後、市民権は入国5年目を経た記念日の1971年10月1日に市民権の申請を行い、2ヵ月待って取得した。この間、研究室の排気改善を実施した。社内での新研究体制の中で、1年がかりでトロントからモントリオールまでの、技術部の組織の改善、研究室内の設備の改善を行った。今も思い出すのは、当時のカナダでは普及していなかった計器による化学構造の解析に、IRとUVの計器を導入し、配送された夜は、2名の希望者の一人として徹夜で設置と始動に当たり、明け方3時頃に完了した。研究所の床に毛布を敷いてひと眠りした思い出があ

る。社内初のこの設備は、やがて業界では不可欠の補助器具となった。

言語はなかなか身につかず、決して達者と言えない中でも、こうして技術研究のリーダーとして、仕事は順調に進んだ。この間、我が家ではカナダに来て最初で最後の三女が生まれ、上の二人の娘たちは中学、高校と無事に進学した。やがて長女はバンクーバーの大学に、次女は近隣の工業専門学校の医科に入学した。僕は、肺気腫という難病と闘いながら、丘の中腹なら風の通りも良く空気も綺麗かと、気分転換を図って近くの高台の中腹に一回り大きな家を買って引っ越した。しかし肺気腫はそんな生易しいことで改善するものではなかった。月の半分はトロントの本社、カナダ東部からアメリカ国内にまで広がっていた得意先の技術サービスと、新製品開発の検索のために出張が続き、体力は急速に衰え始めた。僕が化学会社に勤務することを知らず医師は、病状の悪化を防ぐよう、転職か休職を勧めてくれた。しかし、僕の体調は家の中を歩く事すら困難になってゆき、ある時、救急搬送後の病院で、医師から会社宛てに休職勧告が入ってしまった。

幸いなことに、会社は新たな受入れ方法として、休職を避けて、安全な環境を提示いただき、①研究室には顔を出さないで、自宅から研究管理を電話で行う、②研究技術会合を毎週月曜日、我が家に部員全員が出向いて開催する、③今まで通り、本社、得意先訪問は月一度、2週間の期間で行う、という条件を提示され、医師

の同意を得た。研究所から我が家までは車で15分の位置であったため、今までに近い活動ができることになった。幸い新居には大きな空き部屋があり、10人ほどが集まる毎週月曜の会議には大きな役割を果たした。そして何より、社長と工場長の理解がなくては、ここまでの温情溢れる健康対策を受けられた筈のないことが身に沁みた。しかし、格段特別な僕の病気に対する対応に、不満を抱く者が出るのは当然の成りゆきであった。同僚からの幾つかの反感は、社長や技術関連の常務に感知されていた様だが、表面化しなかったのは社長と工場長のお陰であったことは後になって知った。

それから2年後、再び医師からの警告が会社に提示されて、残念ながら会社としての対策がなく、社長から、「早く回復して、会社に必ず戻って来い」との言葉とともに、遂に退職することになったのは確か1983年であった。通知は体調が悪化して救急病院に入院していた時に届けられた。そして本格的に闘病生活に入ったのである。幸い何とか生活して行けるだけの保険金が給付された。その中で急激な発作は助けられても、病状の改善にはあまり効果を示してくれなかった。新薬に若干の疑問を持ち始め、たまたま何かの雑誌で見つけた自然治療の1週間の講座がロサンジェルスのに南、メキシコに近い部落内にあることを学んで、思い切ってその道を選んだ。

(次号に続く)



長女と次女が三女の3歳の誕生日を祝う

